

## 「春休みは忙しい」

レイラインって知ってる？ 知らないか。まあ、それも無理はない。僕もついこの間、知ったばかりだから。

英語で書くと“ley line”。「夏至や冬至の太陽が照らす光線に沿って、遺跡や神社仏閣などの文化財が直線的に並べられること」らしい。一〇〇年ほど前にイギリスの考古学者が提唱した言葉で、日本にもいくつものレイラインがあるんだとか――。

これから話すのは、そんな日本のレイラインにまつわる話だ。

あれは中学校の卒業式が終わった頃。周りの友達は、受験から解放されて浮かれ気分だった。でも、僕には一つ心配事があった。先週のことだ。スマホを見ていた父さんが「マジかよ!？」と叫ぶと、すぐさま自分の部屋に駆け込んだ。中からは、ひそひそと声が聞こえる。

「ああ、ヤバイなく」、「アオイ」、「じゃあ、二七日」、「あの店で」。

どうやら二七日に誰かと会うようだ。とすると、「アオイ」は電話の相手で、「あの店」は待ち合わせ場所に違いない。

翌日、父さんが「来週末、旅行に行く」と僕に告げた。来週の土曜は二七日。やっぱり、そうだ。旅行の理由は「同窓会みたいなものだ」と言っていたけれど、僕は怪しんだ。そもそも父さんは出不精で、仕事以外は近所の馴染みの飲み屋さんくらいしか行かない。遠出もしない。何より、忘年会や新年会といった大勢での集まりが嫌いだ。だからフリーランスで仕事をしているのだろう。

まさかウワキとか…。僕がまだ小さい頃に母さんを亡くして今は独身だから、彼女がいなくても全然構わない。ただ、息子としてはやっぱり気になる。電話の相手と思われる「アオイ」という名前も女の人を連想させた。そういえば「ヤバイ」とも言っていた。ひよつとして何かトラブルでも抱えているとか…？

二〇二一年三月二七日の土曜日。出発する日がやってきた。僕は父さんを尾行することに決めた。行き先は東京駅から北陸新幹線で一時間半ほど。軽井沢の先にある、父さんが青春時代を過ごした街だ。祖父の転勤の都合で、高校の三年間を、そこで暮らしたと聞いている。

幸い祖父：じいちゃんからもらった高校の入学祝いがある。ホテルに提出しなきゃいけない保護者の同意書も任せた。「一人で卒業旅行に行く」と言ったら大そう喜んだ。「父さんには内緒にして」と念を押す。「適当に言っておく」じいちゃんはそう言ってガハハと笑った。子どもの頃から内向的だった孫の成長を見てうれしそうだった。

父さんの宿泊先は、駅の「温泉口」から徒歩一分のビジネスホテル。駅のこちら側には、ここのしかない。リスキーだけど、僕もそこに泊まることにした。父さんからは「お前の考えはおもしろいけど勘に頼りすぎだ」とよく言われる。エレベーターでばったり…なんて

ことがないよう、何事にも注意しなきゃいけない。

新幹線も父さんと同じ車両を予約した。東京駅で鉢合せする可能性もある。次の上野駅で乗車する。父さんの指定席は三列目のA。ニット帽を目深にかぶり少し後方の窓際の席に座る。ターゲットの動きを確認できて、なおかつ安全な席として選んだ。ここまでは完璧。大好きなスパイ映画の主人公になった気分だ。チャチャチャ、チャチャチャチャッ：おなじみの五拍子のテーマ曲が頭に流れてくる。

情報は父さんのスマホから入手できた。暗証番号は何度か見て覚えていた。

（八三〇六二二）――。

父さんが使っている暗証番号やメールアドレスは、おじさんらしく生年月日の組み合わせが多かった。でもスマホに関しては、それではない。何かの語呂合わせでもなさそうだ。自然と覚えたこの六桁も怪しく思えてきた。

目的地の駅に到着すると、父さんはホテルとは反対側の「お城口」に出て、目の前を通る広い道を真っすぐに進んだ。五分ほど歩いて交差点の角を左に曲がる。すると急に足を止めた。セーフ！ 危ない。見つかるどころだった。

スマホで調べたら喫茶店ようだ。一九六〇年代の創業。父さんが通った思い出の店かもしれない。しばらく店の外観を眺めて、慣れた様子でドアを開けた。窓にかかるレースのカーテンの隙間から後ろ姿が見えた。赤い服を着た先客が手を上げる。何年か前、日曜に父さんが見ていた時代劇で、主人公の父親役だったイケメン俳優に少し似ている気がした。相手が女の人ではなかったことにホッとす。

二人はしばらく談笑していた。店内には父さんとイケメン、カウンター席で新聞を広げるとおじいさんのみ。中で会話の内容を聞きたかったけれど、ハードルが高い。ひとまずは向かいのコンビニの駐車場で店を見張ることにする。スマホを取り出して店内の写真、メニューなど喫茶店について調べた。

気づくと何人か店に入っていくのが見えた。今ならいけるか――。変装用のニット帽と伊達メガネ。少しでも背が高く見えるようワークブーツも履いてきた。

ドアを開けて人差し指を上げると、歴史を感じさせるマスターが「一名様。お好きな席へどうぞ」と言った。父さんと背中合わせになる席が空いていたので、気配を消して素早く座る。イケメンと一瞬だけ、目が合ったような気がした。ついたてを隔てた後ろの席で「おかわり二つ」と声が聞こえた。

考えたら喫茶店に入るのは初めてだった。勝手がよくわからない。子どもだとバレると追い出されるかもしれない。これぞ純喫茶というメニューを頼んで、いかにもSNS映えるレトロ喫茶が好きそうな大学生風を装うことにしよう。

店内にはクラシック音楽とテレビの音が流れている。背中合わせの席に座れたことで、途切れ途切れに単語が聞こえた。

「いや、まさか」「また忍び込む？」「ハッカク」「ゾウが」「例のもの」「持ち出せ

るか、だな」…。

飲んでいたクリームソーダを吹き出しそうになる。えっ、「忍び込む」って泥棒とかそういう相談!? 持ち出す? 例のもの…。「ハツカク」って何か発覚するってこと? 中華のスパイス…じゃないもんね? 「ゾウ」は…ま、とにかく、よからぬ相談のようだ。前に父さんが電話で言っていた「ヤバイな」という声も頭をよぎる。なんだ、フリンしてくれてた方がまだましじゃん!

「お会計を」後ろの席で父さんの声が出た。二人で伝票を取り合いながらレジに向かう。おじさんがよくやる光景だ。じゃらじゃらと小銭を数えている。これもおじさんだなくと思う。ネットにも「電子マネーは不可」と書いてあるんだから、事前にお金を準備しておいてほしいぞ。

不安な気持ちと妙な恥ずかしさが入り混じる。食べかけのチーズトーストを口に押し込むと、二人が店を出るのを確認して支払いを済ませた。会計はぴったり千円。レジでもたつかないよう、計算してメニューを注文した。

店を出ると、交差点の角で二人が別れるところだった。「じゃ、また」父さんは来た道を戻り、イケメンは市役所方向に向かった。どちらを尾行するか迷ったが、イケメンの後を追うことにする。父さんのスマホにはGPSアプリを仕込んでおいた。いつでも足取りを追える。スマホは持っているものの、ニュース記事を読むか買い物をするくらいしか使わない父さんのことだ。気づかれる可能性はまずない。

イケメンが着ている赤いパーカーを目印に尾行を始める。何者なのか知りたい気持ちがあった。見通しのいい一本道だけに、十分な距離をとる。気づかれては元も子もない。しかし、その慎重さが裏目にでた。城跡を目の前にしたT字路で、イケメンが点滅する青信号を走って渡ったのだ。しまった、まかれたか!?

横断歩道まで駆け付ける。渡った先、右手にある城跡内へ続くと思われる橋に赤いパーカーが吸い込まれた。信号が青に変わり、急いで橋に向かう。二の丸橋と書かれた古い橋の入口で遠くに赤い背中がチラリと見えた気がする。ダッシュで追いかける。クソッ、足が重い。スニーカーで来るんだ…と、その時だった。ドスンと激しい衝撃が僕を襲った。

走ってきた誰かとぶつかって転倒してしまう。頭を打ったが、ニット帽と着替えの詰まったリュックがクッションになってくれた。チェックイン前で助かった。

見れば、少し離れたところに少年が「イタタタ…」と言って、うずくまっていた。赤いジャージを着ている。さつき見えたのは、この赤だったのか…。申し訳ないと思った。駆け寄って少年にあやまる。悪いのは急に飛び出してきた僕の方なのに、彼は「こっちこそ、ごめんね」と頭を下げた。

何かおわびがしたかった。その先の駐車場で見つけた自販機で飲み物を買う。喉が渇い

た。ふと目の前の看板を見ると、戦国武将の絵が描かれている。「真田」――。

そうか。ここが父さんがよく見ていた時代劇ゆかりの城跡あることを初めて知った。かつて不落の名城と謳われた城が、ここにあったそうだ。

近くのベンチに座って話をすると、アキラと名乗る少年は僕と同じ年で、この春から高校生だと教えてくれた。部活は陸上部。この城跡のある公園は、人気のランニングコースらしい。

「僕はノブシゲ。一五歳。同学年だね」僕もたどたどしく自己紹介する。

陸上部の彼にはアルカリイオン飲料を「おわびの印に」と渡した。僕はエナジードリンクをチョイスした。慣れない一日でエネルギーを消費していたからだ。

少し落ち着いてアキラくんを見ると、キレイな横顔をしていた。どこか異国の雰囲気を感じさせている。地元ではモテるんだろうな…あ、そうだ！

「ちょっと教えてくれるかな？」たった今会ったばかりの彼に尋ねた。内気で人見知りな僕にしては珍しい行動だった。一気飲みしたエナジードリンクの効果が出たのかもしれない。

「いきなりでなんだけど、ハツカクって聞いて、地元で思い当たるもの、何かある？」

「ああ、それって、もしかしてこれじゃないかな？」アキラくんが親切にもスマホで画像を検索すると、写真を見せてくれた。

「温泉のそばにお寺があつて、その上に八角形の塔が建っているんだけど」

自分でも検索する。すぐに候補が出てきた。国宝八角三重塔。そこに安置されている大日如来像が一般公開されると地元新聞のウェブサイトに載っている。それも明日一日限定。学術的調査以外で一般公開されるのは史上初めてとのこと。何でもレイラインと呼ばれる直線上に文化財が並んでいて、八角三重塔もその一つのようなのだ。ほかに、いくつかのお寺や神社などの名前が出てくる。イギリスにある有名な巨石遺跡ストーンヘンジみたいなものかと理解した。

「ハツカク」とは、この八角三重塔の「八角」。喫茶店で聞いた「ゾウ」は「像が」とも考えられる。ここで間違いないと直感した。

翌二八日の早朝、父さんが動き出した。スマホのGPSを見ると駅に向かっていて。八角三重塔に行くためにはローカル線に乗るつもりに違いない。温泉の名前が付いた終着駅が目的地だ。大日如来像の公開前に、塔に忍び込んで何かとんでもないことをやらすのかもしれない。

拝観は午前九時半から始まる。身支度をしながら、頭の中を整理する。「また」ということは、一度は忍び込んだということになるな。じゃあ父さんが高校生の時か。イケメンは同級生の可能性が高い。前は、なぜ忍び込んだ？それがどうして再び？大日如来像の公開と何か関係があるのか…。

スパイ映画のように天井から吊るされて仏様を盗むなんて思えないが、父さんとイケメンが何かしらの理由で不法侵入しようとしていることは、ほぼ間違い。ましてや国宝だ。見つかったら捕まることもあり得る。何とかしなきゃ！

「急いでください」ドアに滑り込みながら運転席に行き先に向かってを告げる。父さんが乗った電車は、たぶん六時台の始発。次の電車まで三〇分以上も待たなければならなかったから、ホテル前に止まるタクシーに滑り込んだ。入学祝いがある。多少のお金は大丈夫だ。目指すは八角三重塔があるローカル線の終着駅。地元の運転手さんによれば、駅までは電車で三〇分。車で二〇分。少し遅れるか、同じくらいの時間に着けるはずだと言った。

それでも電車よりかは早く着きたい。「すみません、祖父が危篤なんです！」と僕は叫んだ。じいちゃん、ごめんんと心の中であやまりながら――。

「アハハハハ！ バカだなく。お前、それでここまで来たの？」

「いや、だって…」

長野県上田市。新幹線が止まるJR上田駅から直結するローカル線別所線。終着駅の別所温泉駅にある共同浴場の岩風呂で、父さんがむせびながら笑っていた。隣では、あのイケメンと…昨日出会ったアキラくんがニコニコとほほ笑んでいる。

順を追って説明するところだ。イケメン…ヒノミヤアオイさんと父さんは高校時代の同級生。性格も何もかもが正反対。でも、すぐに意気投合して親友になった。おじさんになった同級生二人は、この日わけあつて、大日如来像を一番乗りで見たかった。

で、朝イチにヒノミヤさんが、僕らが泊まったホテルのそばで父さんをピックアップ。車で八角三重塔のある安楽寺までやって来た。そこに、あわてふためいた僕がタクシーで現れて鉢合わせした…というわけだ。

車内では祖父の容体を心配してくれる優しい運転手さんに付き合っつて、GPSを見る暇がなかった。駅構内でGPSが反応していたのは、父さんが「コーヒーを買いにコンビニに寄った」から。アキラくんは、拝観の機会はこれが最後かもしれないからと、連れて来たのだそう。

「そういえば、ノブシゲくん、あの喫茶店にいたよね？」

「えっ、そうなの？」驚いた顔で父さんが振り向く。

あんなに変装して、気配も消していたつもりなのにヒノミヤさんにはバレていたのか。

「一瞬、目が合っただけなのによくわかりましたね」

「いやね、高校時代のマサユキに似てるな〜と思って。コイツも昔は黒縁メガネをかけていたから余計に。そうしたら店を出て後ろを着いてくるじゃない？」

ヒノミヤさんが言う「マサユキ」とは父さんの名前だ。

「ヒノミヤさんは、そこから城跡に向かいましたよね」

「練習終わりのアキラを迎えに行っただよ」

肩まで湯に浸かったアキラくんが「うん」とうなずく。

「あと横断歩道、どうしてあんな走っただんですか？　まるで僕をまくみたいに…」

「あ、あれは喫茶店で…あの店は僕ら二人の行きつけだったんだけど、懐かしのウインナコーヒーをついつい飲みすぎちゃって。トイレに行きたくなっただよね」申し訳なさそうにヒノミヤさんがあやまる。

「じゃあ、喫茶店で二人が言ってた、怪しいワードは？」立て続けに質問した。

「細かくは覚えてないけど、『まさか』八角』三重塔の大日如来“像が”公開されるとは…そんなところじゃないか。お前の推理は大体当たってるよ」と父さん。

「じゃ、じゃあ、『また忍び込む？』と『持ち出す』は？　家で話してた『ヤバイなく』っていろいろは何？」

「ああ、それはね、とつくに時効だと思っただよ…」

ヒノミヤさんが言うには、安楽寺の境内に忍び込んだのは高校生の時らしい。

「あれは君ら二人くらい。高校一年生の時か。マサユキと僕は写真部だったんだけど、その年の夏至の日に、どうしても朝日に照らされる八角三重塔を撮りたくて、朝方こっそり入っただよ」

夏至や冬至の太陽が照らす光線の延長線上に、遺跡や神社仏閣などが一直線に並ぶ——。地元新聞のウェブサイトに載っていた、あの話だ。ヒノミヤさんが言うには、ほかにも夏至や冬至の日に鳥居の真ん中から日が上り下りする生島足島神社だとか、レイライン上にはたくさん神社やお寺があるとのこと。

「一九八三年六月二二日。八三〇六二二ってスマホの暗証番号が、まさにその日ね。それから一〇年ごとに夏至の日に会って写真を撮ろうって決めたから、忘れないようにそうしてたわけ。お前が言う通り、ほかは全部生年月日だけど、いつも使うパソコンとスマホだけはこの番号だ」

「今回はイレギュラーなことがあって、二年前倒しの同窓会になったけどね」

三八年前の夏至の日、首尾よく写真は撮れた。その後、二人はあるものを八角三重塔の中に残した。ヒノミヤさんが話を続ける。

「お互いが撮った好きな女の子の写真を、大日如来像が安置されている一階の隙間から投げ入れたんだ。今まで中が公開されたことがないって聞いてたから大丈夫だろうって」

何というか、スパイ映画が急に青春ドラマになった。ていうか、昭和だなく。

「だって、大日如来像は万物の慈母で宇宙の真理って言われてるんだぞ。ご利益がありそうだから？　ましてやレイラインの上にあるわけだから」少し照れながら父さんが言う。

「レイライン…当時はそんな呼び方をするってしらなかったけど、とにかくキレイだったよ。何かロマンチックでしょ？」ヒノミヤさんが付け足した。アキラくんも横で興味深そうに聞いている。

「持ち出す」って、写真のことだったのか。「例のもの」なんて、まどろっこしいこと言

うから…。

「初の一般公開。ニュースを見てびっくりしたよ。きつとマスコミもたくさん来るじゃない？ 写真が見つかったら、きつと何かしらのネタにされる。『三八年ぶりの奇跡の再会！』とか何とか」

二〇一九年一〇月の台風で被災した別所線が本日一年半ぶりに全線開通した。それを記念して、三月二八日の今日、安楽寺八角三重塔の大日如来像と同じくレイライン上にある信濃国分寺三重塔の内部が公開された。

「またさ、ご丁寧にも二人とも写真の裏にラブレターまで書いたもんだから、これはヤバイぞつて。で、朝イチに行つて、それとなく持ち出せないものかなと」

めっちゃ恥ずかしい！ 是が非でも回収したい気持ちにはわからなくもない。

「ま、ノブシゲくんもアキラも確認したように写真はなかったけどね」

「考えたら一般公開は初めてことだったけど、三八年の間に調査や補修、あと清掃…いるんな人たちが出入りしてるはず。どこかのタイミングでなくなっちゃったのかもな…」  
ヒノミヤさんも父さんもちよつぱり残念そうだ。

「でも、なかったってことは、ご利益があったからかもしれないよ。結果はどうだったの？」アキラくんが聞いた。

「いや、それがさあ…」、「なつ？」おじさん二人が急に高校生の顔に戻る。

「あつたんだよ、アキラの言う通り」

「じゃ、のぼせるから続きはあとでな」

二人は、そう言つて先に湯船から出ていった。妙にキラキラと輝いて見えたのは、温泉の効き目だけではない気がした。

言い忘れたけれど、ヒノミヤさんは現在、地元長野県上田市を中心に活躍する有名な風景写真家。父さんも東京でなんやかんやと撮っている。本人いわく「『そこそこ』有名な」カメラマンだ。高校時代から、お互いに切磋琢磨してきたらしい。脱衣場では、まだ二人でワイワイやっていた。

「親友っていいね」イケメン俳優似のお父さんとそっくりな顔をしたアキラくんが笑っている。

その後アキラくんと僕は連絡先を交換した。気になるご利益の詳しい話は、まだ教えてもらっていない。本来父さんとヒノミヤさんが会うはずだった二〇二三年の、夏至の日までのお楽しみだそうだ。

僕の勘違いだらけの春休みがもうすぐ終わる。